「図書館に行こうよ ―新米司書館長の図書館日記―」　033

Title：　夏の終わりに（願望含む）

　青森市に住んでいたころ、若者の夏の楽しみは何といってもねぶたで跳ねる事。毎年８月６日にねぶたが終わると（７日の昼ねぶたは勘定に入れません）、いつの間にか冷たい秋風に変わっていて、汗をかいた身体がブルッと震えるのも毎年のことでした。大館ではそれが大文字まつりになるのかな。とにかく、今週いっぱいで夏が終わることをエアコンのない事務室で祈っています。あ、閲覧室は涼しいですから、ご安心を。

✿アスファルトが溶ける
　中央図書館の正面入口へのアプローチは、タイル敷きから昨年９月の改修工事でアスファルト敷きに変わりました。冬の間は、スノーダンプやスコップが引っかかることもなく除雪がしやすくなったと、内々では好評でした。
　ところが先日、アスファルトに小さな穴がいくつも穿たれているのが見つかりました。なんだろうと首をひねって考えること数分、スクータのスタンドじゃないかということになりました。しかし、穴の大多数はそれより細く、幅が１センチもないのです。うーむ。
　夏休みの図書館は自転車で来る人が多くて既存の駐輪場に納まらず、アスファルト部分にもたくさん駐輪しています。その時、通路をふさぐ自転車を移動させようとしてふと見たら、スタンドのところが少し凹んでいる。なんと、自転車の自重で穴があくほどアスファルトが柔らかくなっているのです。
　進学して初めての夏、炎天下の道路で靴底が道路に粘りつく不快さに、東京は暑いところだと思い知ったことでしたが、今年の大館は暑さにおいてなかなか負けていない根性を発揮しました。いや、こんなことで張り合わなくていいんだけど、それでも５月だったか大館が国内最高気温だったとき、ちょっと気分がよかったですよね。こんなに真夏日が続くとも知らずに……。
　あとから図書館の本で、アスファルトの融点が 50℃前後の低さであること、大昔から接着剤として重宝されたこと、縄文時代のアスファルトの産地は秋田県でそれが全国に流通していたこと、古代シュメールの煉瓦の大建築もアスファルトがあったおかげ等々、いろいろ知ることができました。えらいぞ、アスファルト。［『トコトンやさしい接着の本』三刀基郷（みとう・もとのり）著、日刊工業新聞社、２００３年、ほか］
　ということで、夏休み中、中央図書館ではアスファルトにコンパネを敷いて、その上に駐輪していただくよう案内しています。スタンドが必ずコンパネの上に来るように置いてください。よろしくお願いしますっ。

✿借りた本が破れたら
　図書館にある本は、市（＝市民）から負託を受けた図書館員が責任をもって選んだ大事な資料です。そしてこのご時世、たいへん厳しい資料費や本の流通の問題などがあって、破れたり汚れたりしても簡単に新しい本に買い換えるわけにはいきません。図書館としては、修理できるものは可能な限り修繕して、できるだけ長く市民が利用

できるように努めています。リサイクルだリユースだと資源の再利用が叫ばれる世の中ですが、わざわざそんな運動を起こさなければならないというのは、裏を返せば資源がまだまだムダに費やされているということでしょう。それにひきかえ図書館のなんと慎ましいこと。ツギのあたったシャツやズボンのように補修の手を加えた本が混在する図書館は、昔懐かしい日本が残る世界でもあります。……ちょっと言い過ぎました。

それはともかく、利用者の皆さんにお願いがあります。図書館の本が破れたりページが取れたりしたとき、自己流の補修をするのはどうかおやめください。

図書館から借りた本を投げたり振り回したり、熱々の料理の鍋敷きにしたり、手近に紙が見当たらない時のメモ用紙代わりに破いたり、といった神をも畏れぬ所業は論外にしても、悪気なくめくった際に破れてしまったり、絵本など何度も何度も読み返すうちページがバラけてしまうことは、言ってしまえば「ままあること」。悪気の有無はともかく、傷んだ本はとにかくそのままの状態で図書館カウンターにお返しください。

いちばん困るのは、自己流の補修が施された本なのです。身体に傷がついたらとりあえず病院に行くように、図書館には傷ついた本をなおす専門家がいます。補修はどうか図書館員にお任せください。　（陽）